

武蔵野大学における初年次教育「武蔵野BASIS」の効果：自己の探求プログラムの効果検証

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2016-06-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, 剛, 熊谷, 太郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/164

武蔵野大学における初年次教育「武蔵野 BASIS」の効果

—自己の探求プログラムの効果検証—

中村 剛・熊谷太郎

1. はじめに

近年、日本の大学教育では初年次教育に注目した取り組みを行う大学が多く見受けられる。河合塾の調査（2009）によれば、初年次教育の目的は、大学によってさまざまであり、早期退学者の減少、友達づくりの支援、学力不足対策、スタディスキル（レポートの書き方など）習得など、多岐に渡っていると述べている。そして、この調査の中で初年次教育の8つの目的というものを掲げているが、その中に多くの初年次教育に共通する目標として「受動的な学習から能動的で自律的・自立的学習への転換」を挙げている。この目標を初年次に解決するのは容易ではなく、各大学がいろいろな取り組みやプログラムを試行錯誤しているのが現状である。

本学はこのような課題に対して、初年次に全学部横断型の教養教育システム「武蔵野 BASIS」という学習システムを実践している。この学習システムでは、4つの分野をバランスよく学ぶということを目指し①「心とからだ」建学と健康体育 ②「外国語」英語と初修（フランス語／スペイン語／ドイツ語／中国語／韓国語）③「学問を学ぶための基礎」コンピューターと日本語リテラシー ④「自己理解・他者理解」基礎セルフディベロップメントと自己の探求とキャリアデザインプログラムという科目構成で行っている。武蔵野 BASISでは、これから大学で専門的な分野の学びをするための自己基礎力を養うことを目的としており、まさに能動的で自律的・自立的学習スタイルを目指している。このような学習スタイルを築いていくには、どのような順序で科目を構成し、何を導入して学ぶかは重要なポイントになると考えられる。

そこで本研究では、武蔵野 BASIS 科目構成の中で、大学導入科目ともいえる、最も初年次（4月初旬）に2日間という集中で行う『自己の探求』という授業を調査しその効果を検証、報告することにした。

本学の学生において、入学して間もない時期にこれから大学で学ぶ基礎という部分で、欠けているものがあるとすれば、それは、「自己理解」というものが一つ考えられる。これまでどのような体験により学習してきたのか、自分を構成するいろいろな要素、それらによる自分の価値観など、人はさまざまな自分がいることに一人で気づけるのはなかなか難しいものである。『自己の探求』では、自分一人では気づけない知らない自分に出会うためにグループで学習をする。現在の自分を開示し、他者のフィードバックにより自分への気づきが高まり、他者と共に気づきあい、グループからチームへと成長する体験（チームビルディング）を通し、「自己理解」を深めていく。

そこで本研究では、武蔵野 BASIS 科目構成の中で、大学導入科目ともいえる、最も初年

次（4月初旬）に2日間という集中で行う『自己の探求』という授業を調査しその結果を検証、報告することにした。調査については、『自己の探求』実施前後に行っているアンケートを用いる。『自己の探求』は前述のとおり、グループで行うプログラムである。そこで、グループ内での社会的スキルを測る KiSS-18、自分に対してどのくらい自信を持てるのかという自尊感情、そして経済産業省が提唱している社会人基礎力の3つの指標を調査項目として採用した。

本稿の構成は以下のとおりである。第2節で調査方法と概要を説明し、第3節で調査結果を述べる。第4節では第3節の結果に基づいて、各項目の値の変化についての考察を行う。そして、第5節で本研究のまとめと今後の課題について述べる。

2. 調査方法と概要

本研究では、2012年4月～5月にかけて、武蔵野大学1年生を対象に行われた『自己の探求』における効果を測定する。質問紙は自己の探求プログラム開始前に学生に配布し、その場で回収した。また、自己の探求プログラム終了後に再度質問紙を配布し、回収した。

2.1. 調査内容について

本研究では、質問紙は、(1) 菊地（2004）の KiSS-18（Kikuchi's Scale of Social Skills : 18 items、4件法）¹⁾、(2) 菅（1984）の自尊感情²⁾（4件法）、(3) 経済産業省による社会人基礎力³⁾（5件法）、(4) フェイス項目から構成した。

これらの質問項目が書かれている調査紙を自己の探求プログラム開始前後に学生に配布し、回答を得た。

2.2. 記述等計量

有効サンプル数は1691である。表1に記述等計量が示されている⁴⁾。学科の特性により、女性が男性よりも多くなっている。また、武蔵野大学の立地上、関東地方出身の学生が多く、全体の約77%に達する。

表1：記述等計量

性別	男性	557	学科	日本文学文学科	208
	女性	1120		グローバル・コミュニケーション学科	215
出身県	北海道	20		政治経済学科	167
	東北地方	84		経営学科	168
	関東地方	1291		人間科学科	221
	中部地方	127		社会福祉学科	142
	近畿地方	27		児童教育学科	168
	中国地方	14		環境学専攻	75
	四国地方	13		都市環境専攻	42
	九州・沖縄地方	42		薬学科	169
	留学生	60		看護学科	109

本研究では、調査項目について性差の検定を行う。後に、学科ごとの結果を述べるが、各学科において、男女比に大きな差がある。男女比が各学科における結果を左右する可能性がある。そのため、各学科における男女比を表2に示す。

表2：各学科における男女比

学科名	男性	女性	学科名	男性	女性
日本文学文化学科	75 36.2%	132 63.8%	児童教育学科	33 19.6%	135 80.4%
GC 学科	56 26.2%	158 73.8%	環境・環境学専攻	38 50.7%	37 49.3%
政治経済学科	108 64.7%	59 35.3%	環境・都市環境専攻	17 40.5%	25 59.5%
経営学科	88 52.7%	79 47.3%	薬学科	53 31.4%	116 68.6%
人間科学科	43 19.9%	173 80.1%	看護学科	8 7.3%	101 92.7%
社会福祉学科	37 26.1%	105 73.9%	合計	556 33.2%	1120 66.8%

上段：人数、下段：割合 (%)

本学での特徴の1つとして、女性学生の割合が男子学生の割合と比べて有意に大きい ($X^2(10) = 187.744, p < .01$) ことが挙げられる。その中でも、グローバル・コミュニケーション学科（以下、GC 学科）、人間科学科、児童教育学科、看護学科については女子学生の比率が男子学生の比率よりも有意に高かった。一方、政治経済学科、経営学科、環境学科・環境学専攻については、男子学生比が女子学生よりも有意に高かった。

3. 調査結果

最初に、2012年度武蔵野大学入学生全体の傾向を捉えるために、KiSS-18、自尊感情、社会人基礎力の各尺度における、受講前と受講後の結果を表3に示す。

表3：各尺度における事前と事後の平均値

	KISS-18	自尊感情	社会人基礎力
受講前	46.31***	22.83***	39.22***
受講後	52.84***	25.54***	50.79***

*** : $p < .01$

表からわかるように、すべての項目において、有意に向上している事がわかる。以下では、項目ごとに、性差の有無を分析し、次節以降でその考察を行うこととする。

KiSS-18 について、表 4 に事前得点と事後得点の学科・性別の平均値を示す。すべての学科において、自己の探求プログラム実施前よりも実施後のほうが KiSS-18 の平均値が有意に大きくなっている⁵⁾。

表 4：KiSS-18 における各学科の平均得点

学科名	男性	女性	学科名	男性	女性
日本文学文化学科	45.51	45.17	児童教育学科	46.66	48.14
	51.96	50.70		54.09	53.42
GC 学科	47.91	47.82	環境・環境学専攻	45.03	46.08
	54.30	53.85		51.84	53.03
政治経済学科	46.19	45.78	環境・都市環境専攻	47.50	43.68
	54.90	52.18		53.40	50.79
経営学科	46.80	46.25	薬学科	43.81	44.92
	54.11	52.59		50.22	52.02
人間科学科	45.51	45.98	看護学科	46.29	47.64
	52.54	51.89		54.43	53.69
社会福祉学科	47.29	45.81	総和	46.15	46.39
	55.20	52.52		53.39	52.51

上段：自己の探求プログラム実施前平均値、下段：自己の探求プログラム実施後平均値

次に、自己の探求プログラム実施前と実施後の平均値に性差があるかどうか、また得点の伸びに性差があるかどうかに焦点を当てる。図 1 は KiSS-18 の性別事前・事後・得点差を表している。自己の探求プログラム実施前では男女の KiSS-18 の平均値に差はなかったが、自己の探求プログラム実施後では、男性の平均値は女性の平均値よりも有意に高い ($t(953.008) = 2.127, p < .05$)。学科別では、政治経済学科 ($t(159) = 2.047, p < .05$) で女性よりも男性の方が自己の探求プログラム実施後の平均値が有意に高かった。

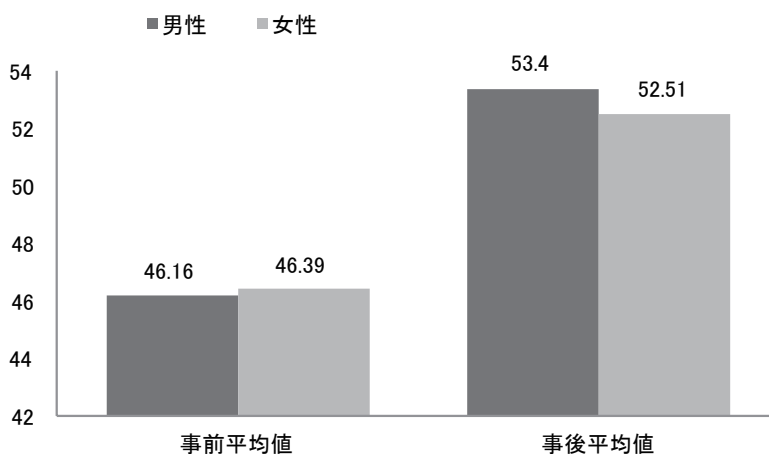


図 1：KiSS-18 の事前・事後平均得点

自尊感情について、表5にまとめられている。すべての学科・性別に関係なく、自己の探求プログラム実施後には、自尊感情は有意に向上している。

自尊感情得点について、自己の探求プログラム実施前 ($t(984.147) = 5.894, p < .01$)、実施後 ($t(928.621) = 4.718, p < .01$) にかかわらず、男性の方が女性よりも有意に平均得点が高いという結果となった。自尊感情は高すぎても問題があると言われているが、自分に自信があるかどうかを測る1つの指標として用いられることから、男性の方がもともと自分に自身があり、実施後もその結果に変化はないことを意味している。

表5：各学科における自尊感情平均得点

学科名	男性	女性	学科名	男性	女性
日本文学文化学科	23.59	22.54	児童教育学科	23.50	23.28
	26.52	25.13		26.64	25.70
GC 学科	25.73	22.90	環境・環境学専攻	22.71	22.75
	27.28	25.63		25.08	25.83
政治経済学科	23.49	22.81	環境・都市環境専攻	25.38	21.64
	26.73	25.18		26.63	24.63
経営学科	24.06	22.57	薬学科	22.36	21.79
	26.35	25.26		24.54	24.84
人間科学科	23.72	21.71	看護学科	23.50	22.85
	25.90	24.42		27.86	25.47
社会福祉学科	22.92	21.90	総和	23.69	22.45
	26.20	25.00		26.27	25.17

上段：自己の探求プログラム実施前得点、下段：自己の探求プログラム実施後得点

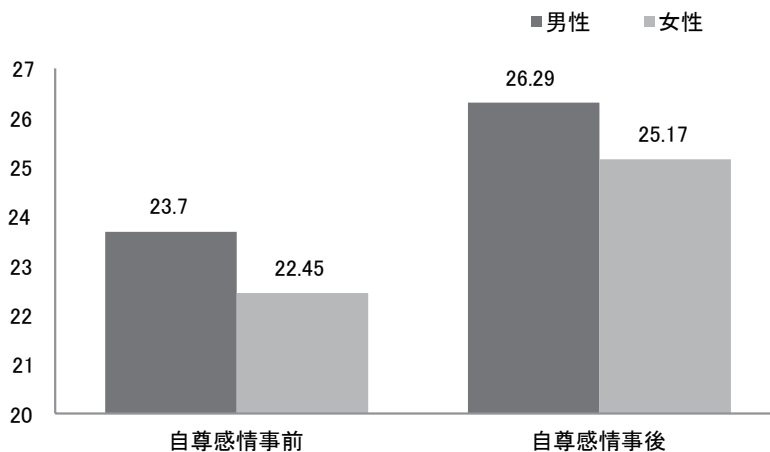


図2：自己の探求プログラム実施前後の自尊感情得点

自尊感情は、肯定感情項目と否定感情（逆転）項目に分けることができる。自己の探求プログラムがどちらの感情により影響を与えるかは図3で示されている。どちらの項目も自己の探求プログラム実施前よりも実施後のほうが平均得点は有意に高くなっている。ただし、否定感情得点よりも肯定感情得点のほうが得点差は大きくなっている。このことから、自己の探求プログラムは否定感情項目の抑制よりも、肯定感情を伸ばすことで受講者の自尊感情を高める力が強いことが明らかとなった。

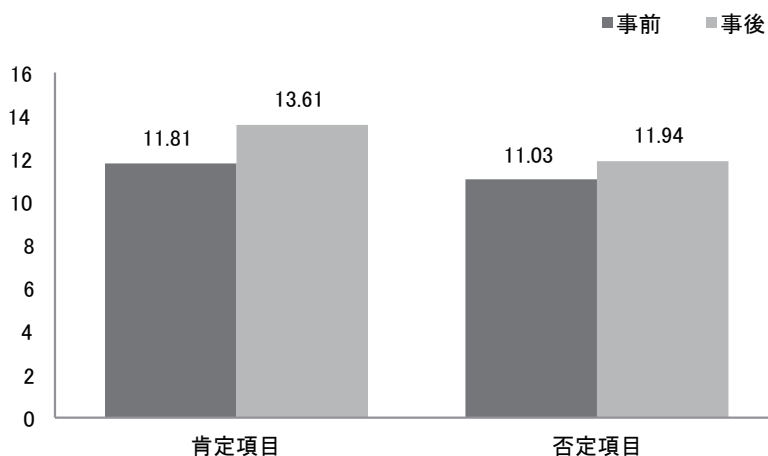


図 3：項目ごとの得点差

最後は、社会人基礎力についての結果である。各学科における社会人基礎力の平均得点は表6にまとめられている。社会人基礎力の平均点についても例に漏れず、学科に関係なく、自己の探求プログラム実施前よりも実施後のほうが平均得点は有意に高い。

表 6：各学科における社会人基礎力平均点

学科名	男性	女性	学科名	男性	女性
日本文学文化学科	38.29	38.70	児童教育学科	39.65	40.32
	49.63	50.00		52.19	52.39
GC 学科	40.34	40.31	環境・環境学専攻	39.50	40.30
	48.47	51.66		50.03	50.63
政治経済学科	38.72	39.28	環境・都市環境専攻	43.93	38.57
	52.33	51.82		48.47	50.05
経営学科	39.39	38.66	薬学科	37.57	37.78
	50.07	50.95		48.02	49.90
人間科学科	39.00	38.42	看護学科	38.00	39.82
	49.43	50.35		48.17	51.31
社会福祉学科	39.66	39.40	総和	39.18	39.24
	51.17	52.37		50.16	51.11

社会人基礎力について、自己の探求プログラム実施前は性差を観察することはできなかった ($t(964.387) = -.615, n.s.$)。しかし、自己の探求プログラム実施後については性差が観察された ($t(885.811) = -3.284, p < .01$)。その要因を明らかにするために、社会人基礎力を「一歩踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」に分けて分析を試みる。

3つに分解した結果は図4と図5にまとめられている。一歩踏み出す力の得点について、自己の探求プログラム実施前は男性よりも女性のほうが有意に高かった ($t(1668) = -2.321, p < .05$)。しかし、自己の探求プログラム実施後の得点については、性差はなくなっている。

一方、考え抜く力の得点について、自己の探求プログラム実施前は性差がなかった。しかし、自己の探求プログラム実施後については男性よりも女性のほうが、考え抜く力の得点が有意に高くなっている ($t(1464) = -3.547, p < .01$)。

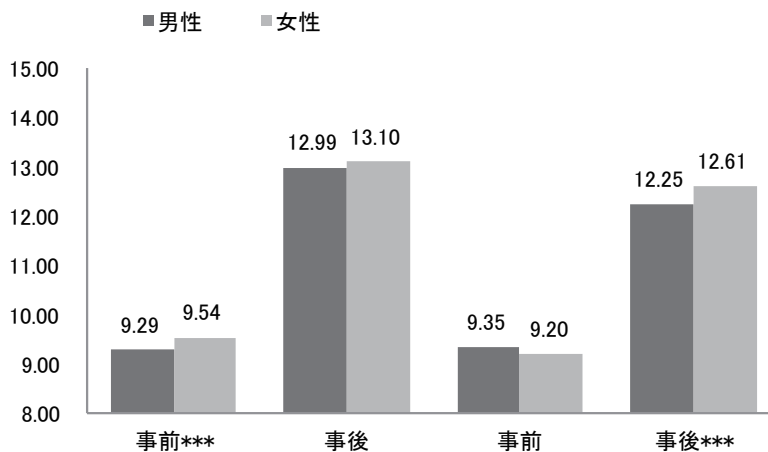


図4：一歩踏み出す力と考え抜く力の性別得点 (***: $p < .01$)

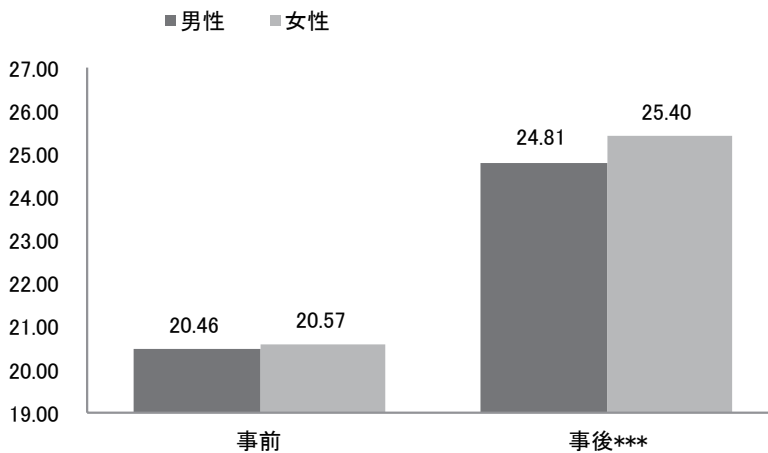


図5：チームで働く力の性別得点 (***: $p < .01$)

チームで働く力の得点について、考え抜く力と同様に自己の探求プログラム実施前では性差は観察されなかった。しかし、自己の探求プログラム実施後には、男性よりも女性のほうが得点は有意に高くなっている ($t(843.569) = -3.440, p < .01$)。

社会人基礎力については、一歩踏み出す力については男女の差はなくなったが、考え抜く力とチームで働く力については女性のほうがより身についたと感じており、その結果社会人基礎力の得点は、男性よりも女性のほうが高いことが明らかとなった。

4. 考察

4.1. 【KiSS-18 について】

KiSS-18 の総合的な結果としては、男女ともに平均値の高まりを得ることができた。その中で、自己の探求プログラム実施前の男女の平均値に差がなかったが、自己の探求プログラム実施後に男性の得点の方が伸びを見せた。この結果は、男性の方が人と話をしたりという基本的なコミュニケーションを取る際に「恥じらい」や「照れ」のような意識が高かったものが、自己の探求プログラムを実施後、緩和、取り除かれることにより、女性よりも著しく高まったものと考えられる。

この結果を裏付けるような事実が質問項目にも表れている。KiSS-18 の質問項目は 18 項目で構成されているが、その中でも著しく平均値が高まった質問項目を 5 つを挙げる。

- ① (他人と話していて、あまり会話が途切れない方ですか)
- ⑤ (知らない人とでも、すぐに会話が始められますか)
- ⑩ (他人が話しているところに、気楽に参加できますか)
- ⑬ (自分の感情や気持ちを、素直に表現できますか)
- ⑮ (初対面の人に、自己紹介が上手に出来ますか)

これらの項目を学生同士が出会う場面として初期段階において考えると、男性は、「恥じらい」や「照れ」の度合いが高ければ高いほど、低い得点となってしまうことが予想される。そして、この状態から「恥じらい」「照れ」が取り除かれていったからこそ、5 項目の得点が著しく高まったと考えられる。特に、質問の⑬についてはグループのメンバーから「受容」されていると感じていないと、得点の高まりは、なかなか難しいと考えられる。したがって、自己の探求プログラムの 1 つの特徴である「傾聴」や「受容」を心がけるといふ意識が学生に浸透していると解釈できるのではないだろうか。

4.2. 【自尊感情について】

自己の探求実施前の平均値の男女差

自尊感情は、自分自身に対する自信があるかどうかの指標に用いられることがある。この観点から、自己の探求プログラム実施前の男性の平均得点がもともと女性よりも高かった結果を考察してみる。

牧・関口・山田・根建(2003)は、この随伴性の認識に注目し、中学生における随伴性と非随伴性の認識に関する尺度開発研究において、随伴経験(自分の行った努力が、成果を得たという経験)、非随伴経験(自分の努力が成果を得なかったという経験)がある。この研究において、自信との関連性の高いと考えられている自尊感情と自己効力感の双方において随伴経験と正の相関があったことを報告している(2006)。この結果から本研究の結果を考察すると、これまでに男性の方が「自分の行った努力が、成果を得た経験」のような成功体験を多く得てきたのではないかということが考えられる。しかし、ここで成功体験が多いからといって能動的な行動があるかという疑問が挙げられる。この自己の探求プログラム実施始まり時間帯では、グルーピングを自分達で行う過程や「コンセンサス」を求めたプログラムがあるが、男性は単純な「決断」「飽き」「あきらめ」などの行動が見受けられる。反対に女性は、「我慢」「粘り」「熟考」などの行動が目立つ。先ほどの成功体験の多さについての疑問と合わせて検討してみると、成功体験が多いからといって、それがグループからチームへと成長する体験(チームビルディング)を通し、「自己理解」を深めていく過程においては、能動的行動として現れるとは限らないということである。反対に、失敗体験から得られるものには、責任感や自立性を備える可能性が考えられる。

自尊感情の質問肯定感情項目と否定感情項目

両項目の比較(図3を参照)した場合、肯定的項目の方が否定的項目に比べて、著しく平均値が高まっている。この結果から、自己理解が深まっていく過程において、否定的な感情が下がるよりも肯定的な感情がより引き上げられる傾向が強いと考えられる。

自己の探求プログラムは、自らが他者に向けて自分を開示して、そのフィードバックから自らが気づいていない自分に気づき自己理解を深めていく。大学入学したばかりの時期に出会った学生がこの過程を2日間という時間の中で共に進めていくが、相互のフィードバックをする場面で強い否定的な言動をして互いに受け容れられるレベルに関係性が深まるかという点、その深まりはスタートに過ぎず個人差や相手によっても違いがあるといえる。自尊感情は、自分の能力や価値に関する評価的な感情や感覚を捉えることもできるが、その「自分への評価」という点について、19歳前後の学生が肯定的に自分を評価することよりも否定的に評価できるとは考えがたい。自己の探求プログラム実施時期を後期や2年次を行うことで、さらに互いの関係性の構築や自分をさらに深く知ることができ「目をそらしたくなる自分」に向き合い、否定的な評価を自ら行い否定的なフィードバックを受け容れられることで成長を遂げることになるだろう。

否定的な質問項目の中で、平均値が高まることなく低下傾向を見せた項目がある。

⑧「もう少し自分を尊敬できたらと思う。」

受講中の学生の声にあったが、「尊敬するって先生、難しいですね。」「自分を尊敬する事って、この授業で持てた少しの自信や自分の頑張り方で何かできた(成功)時、自分を褒めてあげられる感じですかね?」このような表現から感じ取れることは、⑧の質問が低下傾向を

示したのは、そもそも「自分を尊敬する」ということの意味や事柄がよくわからなかった状態から、その意味や現象をそれぞれに考え、解釈した結果、より高次元な捉え方をして、今の自分では「自分を尊敬する」ということに至っていないという判断の表れといえるのではないだろうか。また、⑧の質問については、女性のほうが男性よりも有意に平均値が向上している。これは、男性よりも女性の方が自己理解を深いところへ進めていると考えられる。

4.3. 【社会人基礎力について】

自己の探求プログラム実施前は、性差が観察することができなかったが、実施後に性差を観察できた。その要因を明らかにするために「一歩踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」に分けた検証を考察する。

「一歩踏み出す力」

自己の探求プログラム実施前は、女性の方が高かった得点が、実施後に性差がなくなった結果は、KISS-18の結果にも類似したところがある。一般的に、女性はたわいない会話から話をふくらませることに非常に長けており、男性と比べると対人関係を円滑にする能力が高い。これが、社会人基礎力という「一歩踏み出す力」ではないだろうか。または、集団の中で口火を切る、自ら発信をするというような行動のこともなるだろう。また男子は、「恥じらい」や「照れ」により、自己の探求プログラム実施前は「一歩踏み出す力」が女性よりも低かったのではないかと予想できる。そして、自己の探求プログラムを受講することにより、話のきっかけづくり、継続して話ができるという体験を積んで、男性もその能力が身についたと考えられる。結果、男女ともに向上し、さらには男女差が無くなり同じレベルで向き合うことができるようになったといえる。

「考え抜く力」と「チームで働く力」

自己の探求プログラム実施後に女性の方が得点が高くなった結果について、自尊感情の結果と合わせて考察できる点がある。

「考え抜く力」は、「粘り」や「熟考」などの要素が必要になるだろう。また「チームで働く力」には、他者との関わりやコンセンサスをはかる過程で「我慢」や人の意見や行動を待つという意味での「粘り」などが必要であることが考えられる。これらの必要要素が、自尊感情でも女性の方が高まったという見解をした。自己の探求プログラムの実施中において、特に後半のプログラムになると、より自分自身の深いところへ向き合うようになるが、女性は一つ一つの過程を丁寧に行うような傾向が見受けられる。また、自分の持つ価値観や考え方を諦めることなく、チーム内で共有し進めようとする。しかし、男性に比べて丁寧になりすぎるがあまり、時間がかかり過ぎて結果や結論に至らないといマイナス面もある。ここで対する男性に見受けられる行動として、単純な「決断」「飽き」「あきらめ」などが挙げられるが、これがマイナス面だけとはいえない。女性が決め切れないことや斬新な考え方など、男性ならではのプログラムの進め方による結果を生むことも多々ある。確かに「考え抜く力」と「チームで働く力」では女性の方が身につけたといえるが、自己の探求プログラムの

授業効果としては、チームビルディングという体験の中で男女互いに役割分担をし、互いを知り合い、自分を知り、自己理解を深めているという表だって見えない学びをしているといえるだろう。

5. まとめ

初年次教育としての自己の探求プログラムは、「自己理解」をチームで深めていく過程において、大学生活全体や専門分野、知識の学びの基礎となる「チームで学びあう」という教育的役割を担っていると考えられる。そして、能動的な自律的・自立的学習スタイルを学生に携えていく上で、自己の探求プログラムは、教員による一方的な受動的学習スタイルでなく、学生が自ら「挑む」ことにより学びが深まり、自分にしかない「学びの糧」を得ることができる授業プログラムである。これを私は、『学生同士の学びの場』と呼ぶ。このような学生が自ら学ぶ場創りが、現在の大学教育現場に必要なだと考える。

6. 終わりに

本研究では、初年次教育として、武蔵野 BASIS の自己の探求プログラムがどのような効果を齎しているかという検証を行った。その指標として「KISS-18」「自尊感情」「社会人基礎力」という3指標を用いた結果、どの指標においても著しい向上を示した。特に男女の差異において結果考察を行うことにより、プログラムの効果検証を行うに留まった。

現在、引き続き調査と新たな取り組みを行い、授業効果の検証を行っている。また、武蔵野 BASIS が目的とする、『大学で専門的な分野の学びをするための自己基礎力を養うための力』を得る授業として自己の探求プログラムの構築を目指している。

【現在の課題と取り組み】

- ・他大学との自己の探求の授業効果検証
- ・自己の探求授業を量的研究と質的研究によるミックス研究
- ・自己の探求の授業効果の持続性と期間的適正
- ・武蔵野 BASIS 科目全体の教育効果の関連性についての検証

- ・自己の探求授業の構築（発展科目への取り組み）
- ・産学連携インターンシップにおける取り組み
- ・2年次の授業実践準備
- ・就業力アップの授業開講

註

- 1) ソーシャルスキルを測る尺度である。菊地（2004）はソーシャルスキルを「対人関係を円滑にするスキルで、相手から肯定的な態度をもらい、否定的な反応をもらわないようにすること」と

定義している。

- 2) Rosenberg (1965) は、「自己イメージの中核的な概念で、ひとつの特別な対象、すなわち自己に対する肯定的または否定的な態度」と定義している。
- 3) 「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」の3つの能力、12の能力要素から構成されており、「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」として、経済産業省が2006年から提唱している能力。
- 4) 無回答による空欄などの欠損値があるため、合計が必ずしも有効サンプル数と同じにならない場合がある。
- 5) すべての学科・性別関係に関係なく、平均値の向上は1%有意だった。

参考文献

- Rosenberg, M.(1989) Society and the adolescent self-image, Wesleyan University Press.
- Kawaijuku Guideline 2010 9月号 Kawaijuku Report 大学の初年次教育調査 25-34.
- 菅佐和子 (1984) SE (Self-Esteem) について 看護研究 第17巻第2号, 117-122.
- 菊池章夫 (2004) KiSS-18 研究ノート 岩手県立大学社会福祉学部紀要 第6巻第2号, 41-54.
- 豊田弘司 (2006) 大学生の自尊感情と自己効力感に及ぼす随伴・非随伴経験の効果 奈良教育大学教育学部付属教育実践総合センター 教育実践総合センター研究紀要 15巻, 7-10.
- 牧郁子・関口由香・山田幸恵・根建金男 (2003) 主観的随伴経験が中学生の無気力感に及ぼす影響 教育心理学研究, 51, 298-307.